

「アフリカの食糧問題と WFP の活動」

国連世界食糧計画 (WFP) 日本事務所長
松村 裕幸

こんにちは、松村です。昨日と今日、特に石さんと JICA の橋本さんが、アフリカ一般の統計を使って、アフリカのマクロ的なお話をなさっておりました。ですから、今日、私の方はあまり統計を話さないで、現場の体験談を中心にミクロな話しをしていきたいと思います。パワーポイントを使いながら話を進めていきたいと思います。

(以下パワーポイント併用)

○ハンガーマップというのは、WFP が去年の秋に作ったものです。これは、どこに飢え、栄養不足があるのかということを示した地図です。世界 60 億人のうち、8 億人の人が飢えの状態にある。つまり世界のうち、7 人に 1 人、発展途上国であれば 5 人に 1 人が飢えているということになるのです。極度の栄養不良に苦しむ 27 か国のうち、20 か国がアフリカに集中しています。ハンガーマップは 1995 年、1997 年の FAO のデータから作ったものです。

○これが、先程のハンガーマップというものです。赤いところが、その国の中で 35% の栄養不足のところですよ。ご存知のように、ほとんどアフリカに集中しています。この赤い 35% の極度の栄養不足の国は、世界に 27 か国あります。そのうち 20 か国がアフリカに集中しているわけです。

○この飢餓人口の歴史をさっと見てみますと、これは年代ごとには減ってはいるのです。つまり、1970 年代、1980 年代では世界全体の飢餓人口というのは減っているのです。ただ、気をつけなくてはいけないのは、東アジアは、1970 年代においては食糧不足人口の 53% くらいを占めていたのですが、それが 1980 年代に 42% と減少してきております。ところが、サハラ以南の場合は、11% から 17% と増加してきています。

○1995・1997 年においては、東アジアが減って、やはりサハラ以南のアフリカは増えているという傾向が出ています。2010 年の予想でも、やはりサハラ以南のアフリカが全体の 38% くらいまでいくのではないかと、つまり飢餓の人口がアフリカに集中しているということが今後も続くことが予想されるわけです。

○アフリカの農業の位置ですが、これももう何度も話されているので、特に話すことはないと思います。ただ 1 つ、灌漑率がアフリカはまだ 6% で、アジアが 35% です。昨日、石先生は、アフリカの農業はほとんどホープレス (hopeless) だ、ということをおっしゃられましたが、もしも、灌漑が進んで、灌漑率がもう少し広がっていけば、アフリカの農業というのは、それほど悪い方向にはいかないのではないか、逆に、希望があるのではないか、と思います。

私は、18 年半、アフリカにいたのですが、なぜ灌漑率がこれほど低いのか、ということをお簡単に申し上げてみたいと思います。灌漑を進めることによって、どういう弊害が出るのか、と

ということです。2つありまして、まず1つは、ツェツェバエという眠り病が、灌漑を進めることによって出てきます。2つ目は、マラリアの蚊がかなり増えてきます。そういう二者択一というか、英語では「both sides of the coin」といいますが、灌漑を進めることによって、マラリアや眠り病というものの発生が増えていくのです。要するに、保守（メンテナンス）の問題や衛生の問題にも関与してくる、と思うのです。ですから、灌漑問題というのは単なる農業問題ではなく、衛生やメンテナンスのコンセプトというものが整っていけば、灌漑率はもう少しアップしていくのではないかと、思います。

○今年のルサカ宣言で行われたポイントを挙げてみました。これは一般的なことで、この本にも出ていますので、参考までにあとで読み返していただきたいと思います。

○なぜ、アフリカは、飢餓、つまり食糧問題、農業問題があるのか、ということです。2つの原因があると思います。まず1つは、気象変動と増加する自然災害です。これは、石さんも昨日お話されておりましたが、干ばつが定期的に襲って来ます。これは地球環境問題にも関係してくるわけですが、もちろんアフリカの場合は森林伐採の問題も関わってきます。まず、大きな一つの原因としては、自然災害のためになかなか食糧増産ができないことです。

2つ目は戦争です。1999年の段階においては、53か国のうち14か国で国内紛争が行われております。それだけ戦争が多いのです。戦争が多いということはどういう問題があるかという、例えば、地雷が敷設されるわけです。特に、アンゴラというのは、世界最大の地雷の敷設国です。その他に、エリトリア、モザンビークが上位10番までの国に入っています。アフリカの国には、地雷で苦しむ国が多いわけです。地雷を敷設するということは、単に戦争地に対して地雷を置くだけではないのです。僕はアフリカで見えておりますが、畑などに地雷を置くのです。それによって農業生産ができないという問題が、かなり発生しております。

それから、戦争による難民の問題です。難民・国内避難民によって、農業生産が出来ません。戦争の原因は何かといいますと、アフリカは鉱物資源、ダイヤモンド、金、コバルト、白金など希少金属を、世界の半分近く、保有しております。その他に、民族問題、宗教問題が絡んでくるわけです。ですから、こういう資源問題があることで、利権の問題が発生し、戦争が起こってくるわけです。

顕著な例は、アンゴラです。アンゴラの場合には、もう30年以上、独立前から戦争をやっているわけです。なぜ、こんなに長い間戦争が続いているかという、政府軍は石油を利権にして戦争をしているわけです。ゲリラ軍はダイヤモンドです。ダイヤモンドをバックにして戦争をしているわけです。もちろん、現地の人たちが戦争を実際に行っているわけですが、その裏には、先進国がいろいろ関わってくるわけです。

私は、ギニアビサウという国に、1999年1月から昨年7月まで1年半いました。ギニアビサウという国は西アフリカにあります。この国は1998年6月7日にクーデターが起こりました。なぜクーデターが起こったかという、第1に、政治の腐敗、汚職です。ニーノ・ヴィエイラという大統領が、自分の家族だけを政府の要職につけ、国の富を独占していたのに対し、政府一般職員の給料は、軍人も含めて月20ドル位でした。20ドルで現地で何が買えるかという、米一袋（50キロ）が買えるくらいです。そういう経済失態、政治の失敗に対して、国民も非常に不満を持っていたということです。

第2に、カザマンス問題です。これは、植民地時代の負の遺産、と言われます。アフリカの根の問題は何かという、1884年から1885年にベルリンで行われた、ビスマルク主導のアフ

リカ植民地分割会議が、戦争の根になっているわけです。ご存知のように、アフリカの現在の地図は、定規で引いたような国境が設定されていますが、これは 1884～1885 年のベルリン会議で決められた領土です。それが、やはりギニアビサウのクーデターの要因にもなっているわけです。

ギニアビサウの北、セネガルの南に、カザマンズというところがあります。これは、もともとポルトガル領だったのですが、ベルリン会議以降にポルトガルがカザマンズの場所をフランスに譲渡して、その代わりに南のギニアコナクリの領土と交換しました。カザマンズの人たちは、最初、ポルトガルの支配を受けたわけです。19 世紀後半に、今度はセネガルの支配に入ります。今まで、ポルトガル語を勉強していたのが、急にフランス語の勉強に変わります。1960 年にセネガルは独立しましたが、カザマンズの人たちは、後から組み込まれた人たちですから、ウォルフというセネガルの主要民族の人たちに虐げられた生活をするわけです。

そうすると、何が起こるか。1980 年に、まさに資源問題が起るわけです。1980 年に、セネガルの国境、カザマンズとギニアビサウの間で、石油が見つかります。そうすると、石油問題から、カザマンズの人たちは独立戦争を始めるわけです。カザマンズとギニアビサウは同じ民族ですから、ギニアビサウの人たちはカザマンズを武器援助をしてサポートしていくわけです。1980 年から、そうやってカザマンズの独立運動が始まっていくわけです。

そのうちに、ギニアビサウは政治的腐敗が絡み、経済的にほとんど成り立たなくなってくるわけです。ペゾという貨幣を使っていたのですが、全然価値がなくなってくるわけです。そういうことで、西アフリカにセーファー（CFA）という共通貨幣がありまして、これはフレンチ・フランにリンクした安定した貨幣ですが、ニーノ・ヴィエイラ大統領が 1997 年からセーファー・ゾーンに加盟します。そうすると、セネガルからニーノに対して、同じセーファー・ゾーンに入ったからということで、政治的圧力がかかってくる。カザマンズに対する武器援助を止めると、圧力がかかってきました。ニーノは何をやったかということ、セネガルから経済援助をもらいたいために、その同志であるアンスマネ・マネという陸軍大将を暗殺しようと計画します。1998 年 6 月 7 日に、ニーノに命令された軍人が殺しに行くわけです。そして、アンスマネ・マネがそれを知って、クーデターが起こりました。

1 つ、ギニアビサウの例を挙げましたが、アフリカの戦争というのは、非常に資源問題に関与した問題が多いわけです。ですから、アフリカの問題を解決するには、やはり戦争を終決していくことが必要です。アフリカの戦争を無くしていくことが、一番大きな課題だと思います。

それから、干ばつですが、水不足問題というのは、アフリカではかなり深刻な問題です。一つのエピソードをお話してみたいと思います。私はケープベルデという島にいましたが、年間の降雨量がわずか 150 ミリです。ただ、山がありますので、その地下には水が貯まり、地下水をタンクローリーで各家庭に配付するわけです。日本のように、蛇口を回すと水道管から水が送られてくる、ということではないわけです。みんな水槽タンクを持っていて、それで生活をしているのです。また、タンクの無い家庭では、水用の大きなドラム缶が置いてあります。私が住んでいたところは 2 階建てのアパートでしたが、地下に 6 t の水槽タンク、2 階には 2 t の水槽タンクを持って生活していたのです。タンクローリーが来て水を供給して行きます。

あるとき、水が茶色になって、水の減りが早くなってきました。変だな？と思ひまして、女房とタンクを開けてみましたら、中で何かが動いているわけです。懐中電灯で見たら、木の根っこです。6 t の水槽タンクはセメントで作られたものですが、木も生きなくてははいけませんから、10 メートル離れたイチジクの木が根を伸ばしてきて、セメントが少しひび割れたところから入り、水槽タンクの中に根が生えてきたのです。4 年間おりましたが、こうしたことが 2 回もあ

りました。これほど、水不足はかなり深刻な問題です。

昨日、換金作物というお話がありました。ギニアビサウで経験したことです。カシューナッツを換金作物として作っているのです。換金作物の問題は何かと言いますと、特にカシューナッツの場合には、1年半くらいで実をつけて、換金作物としての評価が出るのです。ところが、カシューナッツの下には、穀物や豆、野菜が植えられないのです。つまり、カシューナッツが栄養分を全部吸収してしまうために、農民たちが自分の食べる他の作物を生産できない、という問題があります。

○アフリカの開発に関して、私の経験では、教育問題というのは大きな比重になると思います。昨日と本日は、高等教育、大学教育という形での話をしていますが、アフリカなどの場合は、一般的に小学校の義務課程は4年制です。世銀の統計では、成人の識字率が40%のところは、1人あたりのGNPは210ドルである。ところが、その成人の識字率が80%のところは1000ドルくらいのGNPを持っている。最低4年間の初等教育を受けた農民の生産性は、8.7%から10%向上する、というデータが出ております。ですから、私はやはり教育問題、特に、初等の教育問題は非常に重要な問題だ、と思っています。

○WFPは、学校給食という形で教育問題に対して取り組んでいます。

○WFPの食糧援助のランキングを見ますと、ここ数年の年度別第1位は、1997年ルワンダ、1998年スーダン、1999年北朝鮮、2000年がエチオピアとなっていて、WFPの食糧援助の上位はほとんど、アフリカに集中しております。

○WFPの食糧援助は、アフリカでも、中止しているところも出てきています。“卒業国”と言っております。例えば、ボツワナやナミビアです。ナミビアは、学校給食をして、かなり成功しました。3年間やって、出席率が30%くらい向上しました。政府も、学校給食を引き継ぐことが出来ました。それから、パワーポイントには書いていませんが、スワジランド、トーゴ、赤道ギニア、あとはモーリシャス、セイシェル、これらの国も食糧援助から“卒業”しています。

このような例からしても、食糧援助だけですが、昨日、石先生がおっしゃられた、「ODAでアフリカをやっても意味が無いのではないか」ということに対する、一つの反例になると思います。食糧援助だけでも、こういう成功例がある、ということです。

もう少しお話したいことがあるのですが、時間の関係で、ここで終わりたいと思います。失礼しました。どうもありがとうございました。